

郭連友 教授/郭连友 教授

北京日本学研究所 センター 元主任/北京日本学研究中心 原主任

日 時 : 2022 年 1 月 5 日

時 間 : 2022 年 1 月 5 日

場 所 : 北京日本学研究所 センター

地 点 : 北京日本学研究中心

使用言語 : 日本語及び中国語

使用言語 : 日文、中文

聞き手 : 野口裕子

采访者 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

(北京日本文化中心 (日本国際交流基金会))

## 【目次】

1. 日本語学習者から教師、研究者へ
  - (1) 日本語学習の経緯と思い出
  - (2) 日本語教師として——「大平学校」と天津ラジオ『日本語ラジオ講座』の思い出
  - (3) 北京日本学研究所 センター 修士課程以降の研究の変遷と日本人研究者の思い出
2. 通訳者として
  - (1) 通訳から学術へのつながり
  - (2) 通訳、研究から一般社会への影響
  - (3) 東日本大震災を伝えて
3. 北京日本学研究所 センター
  - (1) 主任在任期間の日中関係と日本学研究所 センター
  - (2) センター外部の学部生向け活動
  - (3) 日本の民間からの支援
  - (4) 『日本学研究』
4. 中華日本哲学会
5. 中国の日本研究の重要性

## 【目录】

1. 从日语学习者变身为教师、研究者
  - (1) 学习日语的经过和回忆
  - (2) 作为日语教师——回忆“大平班”与天津广播电台的“日语广播讲座”
  - (3) 北京日本学研究中心硕士毕业后的研究变迁、回忆日本研究者
2. 作为翻译
  - (1) 口译到学术研究
  - (2) 通过口译和研究去影响社会
  - (3) 传递东日本大地震的消息
3. 北京日本学研究中心
  - (1) 担任主任期间的中日关系和日本学研究中心
  - (2) 面向中心以外本科生的活动
  - (3) 来自日本民间的支援
  - (4) 《日本学研究》
4. 中华日本哲学会
5. 中国日本研究的重要性

## 【本文】

※インタビュー対象者の使用した言語に基づいて整理しています。/根据采访对象所使用的语言来整理。

### 1. 日本語学習者から教師、研究者へ/从日语学习者变身为教师、研究者

#### (1) 日本語学習の経緯と思い出/学习日语的经过和回忆

私が日本語を習い始めたのは 1973 年の 10 月からです。小学校を卒業して天津外国語学校日本語学科に入りました。その時は日中国交回復の翌年で、外交的な人材が不足しており日本語の学生の数を増やしているということで、たまたま日本語の勉強が始まったわけです。当時は日本語を習いたいという強い気持ちというよりも、むしろ配属されて習い始めたんですけど、そこから 4 年ぐらい勉強しました。

外国語学校を卒業して（注：高校卒業に相当）、人材の備蓄ということで、約半年ぐらい中学校で、日本語の教員というよりもむしろ一般の教員として働きました。日本語を教えた経験はなかったんですけども、いろんな事務のお手伝いをするとか、いざ時期になれば日本語の先生になりなさいという校長の思いがあったと聞いております。

卒業した年にちょうど中国の大学入試制度の改革があって、（文化大革命後）初めて試験を受けて1977年に大学に入ることになりました。ちょうど天津外大に日本語学部があって、募集のお知らせがあって、試験を受けて入ったわけですね。それで、4年間、日本語の勉強をさせてもらいました。特に語学と文学がメインだったんです。大学時代の恩師は郭沫若先生の長女（の郭淑瑀先生）が私たちの古典文学の先生だったんです。特に日本の短歌とか俳句とかの読み方、理解の仕方など、いろいろ教えてもらいました。その他に、通訳とかヒアリングとか、講読あるいは汜読、精読などの授業も受けたことがありました。

## **(2)日本語教師として——「大平学校」と天津ラジオ『日本語ラジオ講座』の思い出——/作为日语教师——回忆“大平班”与天津广播电台的“日语广播讲座”**

大学卒業の年は82年なんですけれども、80年代の初期は中国で日本語教育の人材が甚だ不足していました。私は大学卒業してすぐ学校に残って教員になるわけなんですけれども、一切、教授法とか日本語教育の経験はありませんでした。その時たまたま、「大平学校」という存在を知りました。大学の同僚に一期生と2期生がいらっしゃいまして、卒業していろんな情報を教えてくれたので、日本語教育のこれからの仕事に役立つんじゃないかと思って、申し込んだんですね。それで、試験を受けて、いわゆる「大平学校」の3期生として入りました。「大平学校」で1年間の研修生活を送ったんですけれども、特に教授法とか文法、文章論、さらに日本の文化、思想などについての教育を受けました。当時は大変有名な先生がたくさんおられまして、（例えば）林四郎先生とか佐治圭三先生。そのほかに、日本文化、思想に関するとても有名な先生がおられました。とても印象に残っているのは、松本健一先生。当時はまだ若かったんですけれども、北一輝研究の第一人者で、日本の近代史や、中国の近代史との比較研究を教えてもらいました。さらに尾藤正英先生。この方は東京大学の有名な教授で、日本の幕末思想を教えてもらいました。一年間なんですけれども大変充実したプログラムとか研究内容でありました。今考えてみますと、私がその後、特に幕末の思想とか思想史に関心を持ったのは、ああいう先生方の教えがあって、後の大学院（注：北京日本学研究中心）の自分の研究テーマにつながったと思っています。

その間に初めて日本訪問のチャンスに恵まれて、1か月の日本訪問が実現できました。素朴な印象といえば、中国と非常に大きな違いがあって、日本社会のとても整然としたきれいな街並みとか、人々の明るい表情、そして近代的な交通機関、いろんな意味から、カルチャーショックを受けたというのをはっきりと覚えております。当時は1980年代で、中国で「四つの近代化」を目指すという国のスローガンでしたけれども、やはり当時、模範としたのは日本だったと思いました。

そしてそれが終わって、天津外大に戻りますけれども、勉強したものを大学の教育にすぐ生かすことができ、とても実践力がついたと、大平学校の大きな役割を実感しました。

当時、日本語学習ブームで、全国いたるところでラジオ講座とかテレビ講座とか、日本語の教育講座がありました。私は「大平学校」が終わって1年ぐらい経ってから、たまたま、天津ラジオ放送局で日本語講座の講師を2年間ぐらい務めたことがありました。湖南大学の周炎輝教授が作られた『科学技術日本

語』というテキストでやりました。テキストは（書店で）売っていました。ある時、山東省の若者が、男の方みたいですけど、手紙をよこしたんですよ。「私は以前は不良少年でした」と。「ラジオを聞いて日本語の勉強の意欲が湧いてきて、でも自分の地元ではテキストが買えないので、お金を送りますので買ってくれませんか？」っていう手紙をいただきました。それで私は本屋で買ってお送りしたんですけども、やはり日本語の勉強がある人の人生を変えられるということで、とても充実感を味わったという経験もあります。

### (3)北京日本学研究中心修士課程以降の研究の変遷と日本人研究者の思い出/北京日本学研究中心碩士畢業後研究變遷、回憶日本研究者

私は日本学研究中心での修士課程の時から、日本思想史に関心がありました。当時は、中国の思想がいかに江戸時代に受け入れられたのか、とりわけ儒教思想の中の孟子思想はどのように日本人に受け入れられ、理解され、日本社会や日本の思想の中で生かされたのかについて関心がありました。

北京日本学研究中心では1985年から87年まで勉強していたんですけども、当時の私たちの恩師といえば、文化コースに源了圓先生がおられたんですね。源了圓先生は国際交流基金の「北京日本学研究中心事業協力委員会」の委員でもあるし、日本思想史学会の会長、日本学士院の会員でもあり、日本の学界で大変有名な先生でもあります。大変偉い先生だったんですけども、修士課程の私たちをICU（国際基督教大学）で受け入れてくださったんですよ。私たちはまだまだ日本研究の基礎が薄かった時代に、源先生は、「毎週土曜日に一緒に本を読みましょう。江戸時代の思想家の伊藤仁斎とか、吉田松陰とか、あと中国の孟子とか、この三つを一緒に合わせて読みましょう。」ということで、ほとんど一対一で読みました。私が発表したものを、先生が一つ一つコメントしてくださったりして、とても丁寧に教えてくださったわけです。思い返してみますと、今の研究の基礎はやはり源先生によって固められたのではないかと感じております。

それから生活面もいろいろと面倒見てくださいました。実は、ICUにいた時、自分の不注意で盗難にあいました。その後、先生が、「気を落とさないで、落ち込まないで」と、一時金を出して下さって、「返さなくてもいいから使いなさい」と言ってくださいました。

その他に、源了圓先生は、「皆さんの日本研究はもちろん日本の研究にも役立ちますけれども、これから中国の発展にも役立つんだよ」ということをおっしゃいました。私たちの日本研究は、日本の研究だけでなく、中日両国の関係の改善とか、あるいは中国の発展、これからの文化的な向上とか、それにも役立つんだということを教えられました。

2年間の大学院が終わりまして、そして北京外大を卒業して天津外大に戻りますけども、自分の研究をさらに高めていこうということで、日本留学を目指すことになります。日本学研究中心の卒業生の中から第1回目の（日本留学）派遣ということで、国際交流基金の選抜試験を経て、日本の（当時の）文科省の国費留学生に選ばれて、日本（注：東北大学）で博士課程に入ることができました。その時はずっと、孟子、儒教思想、特に江戸時代末期の思想家、吉田松陰などを中心に研究を進めてまいりました。そこで吉田松陰の思想形成、特に中国とのかかわりについて博士論文をまとめたわけです。

吉田松陰の思想形成においては孟子の影響がかなり強かったし、日本の倒幕思想の中には孟子の思想

が含まれていたのではないかということをはっきりとしたり、吉田松陰が清末の改革——康有為とか梁啓超とか——にも影響を与えてるということを、実証研究で明らかにしました。それで私の研究は、『日本経済新聞』の文化コラムにも「幕末研究が進む」<sup>i</sup>ということを取り上げられました。

吉田松陰の思想形成が、中国の太平天国の影響が強くあったということは、日本の吉田松陰の研究を深めることができたのではないかと、学界から一応の評価をいただきました。それで私もとても良かったと思っています。

## 2. 通訳者として/作为翻译

### (1)通訳から学術へのつながり/口译到学术研究

私は、1991年に東北大学に留学に行って、博士課程に入ることになりますけれども、そこについてから、仙台の裁判所で通訳が必要だということで、大学の留学生課から頼まれたんです。そこから通訳との縁があったわけですが、そこで4、5年ぐらいやりました。そこでいろいろ鍛えられて、経験を蓄積しました。

1999年に帰国しますと、中国はちょうどWTO加盟を目指していて、2000年にWTO加盟を果たすことになりますけれども、その当時から、いろんな日本との交流が非常に盛んに行われました。それで、通訳のニーズも非常にあったわけですね。私もたまたまそういう経験があるので、同時通訳とか逐次通訳とかもたくさん頼まれました。宝塚歌劇団が北京を訪問した際に、私もたまたま、字幕の通訳とか現場での通訳とかを頼まれました。それ以来、いろんな、経済とか貿易関係の他の通訳をたくさん担当したんですけれども。

思い出となるのはやはり宝塚歌劇団ですね。戦後初めての中国訪問で、中国は大変重要視していました。記者会見の時は現場にたくさんの記者たちが集まったんですけれども、私が通訳しながら実感したのは、記者たちの質問は何かかみ合わないというか、宝塚歌劇団に対する理解が不十分だったということです。当時はインターネットの時代ではなかったんですけれども、やはり情報不足で、皆様は日本の演劇に対して知識が甚だ不足しているということを実感したんです。その時、たまたま私は北京大学で非常勤をやっていたんです。それで、日本の演劇について、何か紹介の本を翻訳したり、あるいは何か書いたりすることはできないかっていうことを思いついたわけです。それで、教えた修士課程の皆さんと相談して、「じゃあ、やりましょう」と。ちょうど、河竹繁俊先生の本『概説日本演劇史』<sup>ii</sup>という本が、国際交流基金から（翻訳を）勧められていました。私たちはそれを見て、非常にまとまった演劇の紹介の本なので、「やりましょう」ということを決めたわけですね。国際交流基金の助成もあって、出版はスムーズでした<sup>iii</sup>。ただ翻訳は本当に苦労でしたけれど。歌舞伎とかいろんなものを勉強しながらやりました。

そしてその本は、後にはですね、中央戯劇学院の東洋演劇の指定テキストとなったそうです。今でも使われています。ですから、通訳から翻訳、翻訳によってまた日中の文化的な理解とか相互交流につながっていくということが言えると思いますね。

もう一つ、一緒に翻訳に参加した北京大学の大学院生は、その影響で日本の演劇に非常に興味を持って行きました。後に『日本の能楽』<sup>iv</sup>という本を書かれた中国郵電大学の左漢卿先生、そしてもう一方は中国芸術研究院の李玲先生で、日本の狂言について一冊の本を書かれたんです<sup>v</sup>。翻訳によってその影響を

受け、関心を持ち、日本の演劇に関する研究を深められたということが言えると思います。

きっかけは通訳だったんですけれども、そこから気が付いたことが、また皆さんや自分の研究につながることができると思っています。

私自身は、日本のミュージカルや演劇の字幕の翻訳などもしますが、鈴木忠志さんが監督された演劇の『リア王』の字幕の翻訳をしたことがあります。これは日本の侍との思いと結びつけながらシェークスピアの『リア王』を改変した劇なんですね。それを翻訳しながら、日本の思想や演劇に対する理解が一層深まっているということが言えると思います。

## (2)通訳、研究から一般社会への影響/通过口译和研究去影响社会

2007年の時、日本の歌舞伎の公演が北京で行われたんですね。当時は、一般の庶民の歌舞伎に対する認識が薄くて、なかなか観客が集まらなかったんです。私は実は、宣伝活動に参加したことがあるんですよ。北京放送に呼ばれて、歌舞伎の魅力とかそういう話をしたりして、皆様の関心を引き起こそうとしました。その後は、こういった本とか皆さんの研究成果によって、一般の方々の日本の古典演劇に対する関心も集まると思うんですね。

話によりますと、数年前に日本の狂言や歌舞伎の公演が北京で行われますと、あっという間、3時間ぐらいいチケットがなくなるとか、そういう盛況だったんですね。やはりこういう地道的な努力は、ある程度の成果はあったのではないかという風には私は考えております。

## (3)東日本大震災を伝えて/传递东日本大地震的消息

東日本大震災が発生して直後、CCTV の4チャンネル（国際ニュースチャンネル）から連絡がありました。私は当日は行けなかったんですけれども、翌日から、もう本当に生放送の現場で一週間くらい仕事をさせてもらいました。その時はNHKのテレビの番組をそのまま流して、必要な部分を編集長がイヤホンで知らせるわけですね。「この部分を訳しなさい」ということで。非常に緊張した雰囲気の中で、その場で、NHKの番組を、そのまま生放送の形で放送していました。何も準備ができなくて、テレビの映像見ながらやらなくちゃいけないので、とても不安でたまらなかったんです。非常に緊張しながらそういう仕事に携わったんですけれども、私は仙台でしばらく留学した経験もありますので、そのショッキングな場面を見ながら、やはり自分も非常に悲しくて、場合によっては涙ぐむ場合もありました。声もちょっと変な声になったりする時もありました。そういうことをしながら、やはり伝えるわけですね。当時、中国では、日本の地震に対する関心がものすごく高かったし、また原発の事故もあるので、関心が非常に高かったですね。やはり多くの場合は、日本の被災地の皆様に対して思いやり、同情、そしてお見舞いの気持ちが強かったです。私たちもそういった報道に参加して、中国の一般の国民に情報を伝えると同時に、皆さまのそういう思いやりを、呼び起こしていると思うんです。

とてもハードな仕事でしたけれども、とにかく中国の報道はとても前向きでした。日本の事故の分析、地震の被災地の様子をありのままに紹介したりして。そして我々はどうすればいいか。中国の人が何か手を差し出さないといけない、そういう気持ち、雰囲気をやはり現場で感じました。そして、中国政府が日本に対するそういう支援をチャーター便で行ったことも、やはりお互いに関連性があると考えています。

その後は、100人の中国の日本研究者が、『環球時報』（注：中国の新聞）を通じて日本に対する募金を呼びかけました<sup>vi</sup>。東北大学出身の方々（注：留学経験者）がメインでありました。震源地は東北の仙台と福島辺りなので、我々はやはりそこで研究した、そこで勉強した経験もあるし、第二の故郷みたいな存在なので、私たちはそれを見て、やはり積極的に参加したわけですね。私もその中の一員として、皆さん、名前も書いて、積極的に募金に参加しました。何らかの形で、やはり支援を表明したいという気持ちが強かったと思います。

震災の翌年に、仙台の近くの古川にある吉野作造記念館の館長さんが——私の大学院時代の同窓生だったので——ぜひ一度、中国でどのように報道されたのか、講演に来てくれないかというご招請がありました。それでいろいろ準備して、そこでお話をさせてもらったんですけども、みんなとても関心があって、会場には90人ぐらいの席があるんですけども満杯だったんです。聞きながら涙を流してる方もおられるし。

そして後に（地元の）新聞で報道されました。中国で、震災のこと、皆様が地震に対してそういう風に頑張っている様子をこういう風に伝えただよってことを報道されて、お互いの国民同士の理解がある意味で深まったのではないかなと思っています。

### 3. 北京日本学研究センター/北京日本学研究中心

#### (1) 主任在任期間の日中関係と日本学研究センター/担任主任期間的中日关系和日本学研究中心

我是2012年做日研中心的副主任，当时的主任是徐一平老师。我们一起合作了4年。然后徐一平老师2016年退休，辞去了中心主任的工作，我接替了主任的工作。实际上主持工作吧。在此期间，其实中日关系也面临着很多困难，但是我们作为北京日本学研究中心，尤其是我们这个地方是和日本进行人际交往、文化交流的，所以我觉得，从2016年到2020年，我退休之前4年时间，我们中心还是跟日方保持着非常好的关系，尤其是和日本的大学、研究机构。

比如说，我们有神户大学和我们日研中心的双学位制度。我们经济专业的、社会专业的学生去神户大学拿双学位的文凭，神户大学有的学生到我们这里来进修，然后在这个地方拿北外的文凭。同时，我们还和广岛大学建立了双学位制度，还和冈山大学建立了双学位制度。同时我们还和九州大学商讨建立双学位制度，这个还没完完全全地落实起来。同时在这个期间，我想我们和日本的国际日本文化研究中心（简称“日文研”），还有包括御茶水（女子大学），还有一些日本著名的大学都有学生互换的交流关系。也有教师的互换，还有一些学术交流会等这样的文化交流和学术交流的活动。所以我觉得我们这个期间没有受到其他因素的影响，一直是比较正常地进行教学、科研、对外交往等等这方面的工作。

（期间，）中日之间因为面临很多政治上的问题，包括领土问题、历史认识问题等等这类的。这些问题其实我们作为研究者也是非常关注的，但是我觉得不能因为这些问题影响两国的国民之间的交往，也不能影响两国之间的学者之间的交流。正是因为有这些学者，我想逐渐会解决这些政治上或者历史认识方面的一些相互之间的误解，甚至说互相之间的不同。只有通过研究，更深层次地研究，加深这方面的深入了解，我想这些问题会慢慢得到化解，慢慢会得到解决。

## (2)センター外部の学部生向け活動/面向中心以外本科生的活动

中日关系虽然说是比较严峻,但是我想我们中心一方面是和日本的各个大学进行学术交流,同时我们一直面向普通的学生进行学术方面的讲座,还举办了日本电影的专门的讲座活动。这个是受到了日本国际交流基金会北京事务所的大力支持,在我们这个地方定期举办日本电影观赏会和点评会,请到了著名的电影评论家来给我们讲解。像日本的动画片了,还有日本的一些著名的电影。同时,在这个期间,正好赶上高仓健去世一周年,我们在北外,和交流基金会,还有大使馆合作举办了高仓健去世一周年的回顾展,播放了很多高仓健著名的电影,像《远山的呼唤》、《追捕》,还有一些其他的非常著名的电影。很多来自于北京各个大学的高校老师、学生,包括北外的一些学生,都积极地参与,效果是非常不错的。我想通过这种形式,也能够加深两国之间的普通民众、学生之间的一种交流。我们不被一些其他的因素所影响,继续从事着文化艺术方面的交流。

## (3)日本の民間からの支援/来自日本民间的支援

我们中心一个是得到了国际交流基金的大力支持和援助,在派遣教师,派遣学生留学的时候给我们很大的帮助。除此之外,我们从2015年开始,又受到了日本企业三菱商事的大力援助,资助我们留学生的派遣以及我们的出版。还有,我们跟三菱商事共同举办讲演会,在全国各地的大学举办讲演会。这个活动也是深受学生们的欢迎,有些大学都在边远地区,这些地方往往和日本人的接触比较少,对日本的了解也不是那么充分。于是我们北外和三菱商事共同去做这个讲座,一方面是介绍日本的企业文化,同时也介绍我们中心所从事的一些活动。我觉得这些活动都很有效果的。

还有卡西欧,我们合作多年。卡西欧在中国创办了卡西欧硕士优秀论文的评选活动。这个活动是全国规模的,而且做的是越来越大,影响力也是越来越大。每年卡西欧组织老师评选,然后选出优秀的论文。各个大学也争相推荐自己的优秀的硕士论文,这个活动一个是影响力较大,一个是对于学生的论文的质量的提升起到了非常关键的作用。我们也对卡西欧多年来的这种资助、帮助也是特别的感恩。

另外,我们还受到了阿含宗、伦理研究所、还有里千家等等,社会多方面的援助,所以日研中心的成长离不开这些人的帮助。我们非常感谢他们对我们的巨大的帮助。

## (4)『日本学研究』/《日本学研究》

我还要说一个事情就是说,我们中心有一个全国性质的规模比较大,应该说作为学术杂志是说比较高端的学术杂志,叫《日本学研究》。这个杂志诞生的时间比较早,创刊是在1991年。当时也是基金会派遣的很多日方的专家、著名的专家和中方专家一道,我们创办了《日本学研究》。当时叫“以书代刊”,1年出1期。后来我们发现一年出一期远远满足不了中国社会对日本研究的期待,所以我们从2018年开始,就变成了两年两期。通过2期的方式我们进行了大规模的改版,把它变成了非常正规的、全部用中文的、通过向著名的学者约稿和社会投稿的方式,来使这个刊物再次焕发出了生机。我们经过了4年的努力,这个刊物已经正式成为中国的CSSCI的这样一个具有很高学术水准的,受到社会高度评价的刊物。所以我们希望今后继续保持这样的一个势头,进一步地在中国的日本学研究方面做出我们应有的贡献,也为中国的日本研究学者搭建比较高端的学术平台。

## 4. 中華日本哲学会/中华日本哲学会

我曾经在中华日本哲学会里做了4年会长,是第五任会长。这个会最早是80年代创立的,在中国的日

本研究当中算是创立比较早的一个学会。当时是中国社科院哲学研究所和延边大学共同创办的。这个研究会专注于日本哲学，当时尤其是对马克思主义哲学进行研究，而且持续了很多年。现在这个会越来越壮大，会员应该是 200 人左右。原来我当会长的时候，会员不足 100 人。现在已经规模很大了。

最初是以研究日本马克思主义的哲学为起始创立的。现在这个学会不仅仅研究马克思主义思想，当然里边还有研究马克思主义思想的学者，有很多，同时，还有研究其他的，像日本的西田几多郎的哲学，还有日本的思想，还有井上圆了等等之类的，著名的日本思想家、哲学家，包括佛教，儒教等等，现在它的研究范围是越来越宽广，应该说视角也越来越宽广。

这个会还有它的会刊《日本哲学思想研究》。会刊是 1 年 1 期，我们争取向 1 年 2 期的方向去努力，给年轻学者提供一个很好的学术交流的平台。同时，这个会还经常举办大概一年两次以上的研讨会，甚至有的时候和日本哲学会共同举办哲学论坛等等，活动比较频繁。所以年轻人可以利用这个机会发表自己的论文，同时也和日本的学者有很好的互动。这里边的成果有的时候也会在日本的学术刊物中发表，能够起到双方之间相互理解的作用，在日本的哲学研究中，从中国人的视角来研究的成果也是有很多不错的，所以对日本的研究也起到了一定的促进作用。

日本的哲学研究，因为中国和日本在历史上有很密切的文化交流、思想交流和互动的这样的一个历史的由来，所以中国人研究日本哲学的视角可能和其他的，像韩国、越南的可能不太一样。比如西田几多郎的哲学，它里边涉及到很多佛教因素，禅宗是和中国有关系的，也涉及到很多儒家思想，等等。这些如果从中国人的视角研究的话，可能能够使它更加深入，所以我觉得中国的日本哲学研究应该有补充日本的有些研究当中的一些不足的地方。我觉得这些对双方都是有意义的。

## 5. 中国の日本研究の重要性/中国日本研究的重要性

我们回顾历史的话，应该说 80 年代掀起了一股研究日本的热潮。那个时候主要是以日本为近代化的楷模，中国人更多想的是向日本学习。现在我想中国的日本研究逐渐视野更加宽阔，不仅仅向日本学习。当然，向日本学习依然是我们中国研究日本的重要的任务，比如说日本是走在我们前头的一个国家，它同时也面临着很多问题，少子高龄化，或者是环境问题，它都经历过。而日本的这些经验，我们通过中国的日本研究能够把这些经验学过来，为中国的今后的这些问题提供非常好的帮助。今后，中日双方的学者不仅仅局限于两个国家所面临的问题，他们可能更关注世界全球化的一些问题，比如地球的温室效应，还有大家面临各种各样的危机的时候，大家应该怎么样去共同研究，共同处理，像老龄化的问题等等。我就想，可能今后中国的日本研究不仅仅是学习日本，在这基础之上，我们可能要和日本学者共同的互动，来为世界的和平与共存，我们应该共同努力，做出应有的贡献。我觉得这一点更加要求中国的日本研究学者有这样的一种眼光和胸怀，以宏大的视角，全球的眼光，来展开自己的研究。

我想另外一点就是，我觉得可能我们中日之间的学术交流，也是不应该受到各种因素的影响，应该继续保持下去。因为学术交流是人与人之间的交流关系，它会直接关联到两国的国民感情，我觉得这种交流不仅仅是学术层面的，还是人际间的往来，可能更是我们需要今后来做的，也特别希望国际交流基金会继续在这方面发挥重大的作用。这些需要我们双方共同的努力。

公開：2023 年 7 月 6 日

- 
- i 2002年6月1日『日本経済新聞』「幕末の主役たちに新視点」
  - ii 河竹繁俊著『概説日本演劇史』岩波書店、2002年
  - iii (日)河竹繁俊著,郭连友等译《日本演劇史概论》北京文化艺术出版社,2002年
  - iv 左汉卿著《日本能乐(日本文化艺术丛书)》外语教学与研究出版社,2011年
  - v 李玲著《日本狂言(日本文化艺术丛书)》外语教学与研究出版社,2010年
  - vi 《环球时报》‘让我们向日本伸出温暖的手——100名中国学者的倡议书’2011年3月16日